

山形大学附属博物館報27

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

2001. 3

目次

開かれた大学博物館のために	中川 重 (1)
にせもの三葉虫	大友 幸子 (2)
資料紹介—オオクチバス (ブラックバス)	(4)
お知らせ	(5)
平成12年度事業報告	(6)

開かれた大学博物館のために

館長 中川 重

沖今、多彩な蒐集家や好事家の収集品や家宝と伝わる骨董品などをスタジオに持ち込み、その道に精通している専門家(?)に鑑定してもらうというテレビ番組が好評を博し、高視聴率をあげている。人気を博している大きな理由は、自称「お宝」の真贋の鑑定結果に一喜一憂する様が、有名タレント達の軽妙洒落な司会でテンがよく展開されるとともに、鑑定理由が素人にも分かりやすく説明されるという演出によるものであろう。時にはあつと言わせて会場を沸かし視聴者を驚かすような高額な評価を得る逸品・名品が飛び出したり、文化財にも該当するような貴重品が見つかるのも、番組への興味や楽しみを倍加している。

しかし、ここでどんなに高額な希少品として鑑定され、文化財的にも貴重なものと評価されても、それは博物館等で所蔵・保管している標本・資料や指定文化財のような価値が認められたわけではないことはいまでもない。その最大の理由は、これらの出品物のほとんどが私蔵化されたものであるということである。

博物館の原型が、さまざまな形で収集されたり保管された貴重な自然標本・資料や文化遺産を、一般の人たちに公開利用させることから始まったという歴史を顧みるまでもなく、博物館で収集・保管された標本・資料等には根拠的に一般に広く公開し利用してもらうという公共的義務が付帯し

ているということである。

公開の一般的形態は、所蔵・保管している標本・資料等の実物を展示することであるが、ただ単に陳列して「見てください」といった受け身的な展示方法は前世紀(新世紀になったばかり?)の遺物にしたいものである。新しい世紀の博物館の創出のためには、所蔵・管理している標本・資料等の積極的な公開と、展示のレイアウトや標本・資料等の説明などに展示意図やテーマ性が見学する人たちに分かりやすく明確に見て取れる演出も必要であろう。

その第一歩として、昨年の特別展では新世紀に先駆けて「山大博物館のお宝」展を開催し、埋もれていた収蔵品や新規購入の歴史資料を公開して好評を得た。また、現在地学部門の学芸研究員の先生方の協力を得て、山形県産の岩石・鉱物を中心にして地層環境を分かりやすく解説するための展示換えを進めているところである。

また、本館が収集・保管している学術標本や資料等を広く研究・教育に利用してもらうために、最も充実した収蔵資料である古文書資料について毎年「古文書史料目録」を刊行してきた。すでに今年度で23号に達し、学内外の地域史研究者にとって資料利用の情報源として大いに利用されている。今後、本館所蔵の学術標本・資料を学内外の研究・教育により一層活用してもらうためには、所蔵標本・資料等をデータベース化して、ネット利用に供することが必須である。とくに自然標本や民俗資料などについては、実物に限りなく近い実体表現が必要である。将来的には映像化はもとより3

D表現が可能なアーカイブとしての情報発達が可能な博物館こそが真の大学博物館（University Museum）であることを目標にしている。

さて、本館で所蔵する学術標本・資料等は国の重要文化財（有形文化財）はもとより、県レベルの文化財に指定されたものもない。しかし、文化財の指定を受けることによって、本館の広く社会的な認知に役立つとともに、文化財保護法（条例とも）によって、指定文化財の所有者には「公共のために大切に保存する」管理・保護責任と「公開」の義務が生じることが明示されており、開かれた大学の施設として学外的社会的にもより大きな責務を負うとともに、学外からの関心を引き寄せることも期待されよう。

現在、本県の考古学上貴重な遺物資料と近代史の映像的資料として歴史的にも美術史的にも貴重な絵画資料の数点を、山形県有形文化財として指定してもらおうべく県教育委員会に申請しているところである。指定の折りには、特別展等を開催してその資料の学術的価値や素晴らしい実体を披露し、改めて本館の存在を再認識する機会になればと思う。

今後とも、附属博物館への一層のご理解とご協力をお願いする次第である。（教育学部 教授）

にせもの三葉虫

大友 幸子

昨年お正月明けに、母を連れてモロッコ旅行に参加した。わたしにとって2度目のモロッコ旅行で、行程の半分は以前と同じところを訪ねるのだが、どうしても再訪したい国であった。1992～1993年クリスマス休み、わたしはスペイン、バルセロナ自治大学に留学していた。日本から比べればスペインはモロッコのほんの隣の国である。バルセロナ滞在中にどうしてもモロッコに旅行に行こうと考えていたので、気候的にも暑くない冬を待っていた。どうしてもモロッコに行きたいと思ったきっかけは、知り合いの地質家がJICAの派遣でモロッコに滞在し恐竜の足跡調査をした本を院生の時に読んでから、その本の中でも、現地の人々

とのコミュニケーションに苦勞しているくだけりがあり、また地球の歩き方を読んでもどうもいままでに経験したことがない別世界があるらしい……、友達も誘ってみたが、だれもいっしょに行きたがらない……覚悟を決めてわたしは貧乏1人旅にでかけた。バルセロナからは片道約20数時間のバスでアルヘシラスへ、そしてジブラルタル海峡を渡ってモロッコのタンジェに着く。ここからカサブランカマラケシュエザゴラマラケシュエズータンジェと一部列車（もちろん2等）で、大部分が安い長距離バスで移動。女子学生に道を聞けば教えてくれるし（ただしフランス語）、列車の中では親子づれがひまわりの種をくれて食べ方も教えてくれるし、とりにすわったおばさんからは水をくれとねだられたりするし、一般の人々は普通で、これだけならとっても楽しい旅である。が、いつも容赦なく話しかけたりつきまったりする男たち（ガイドをすると近づいてきます）を1人又1人と振り払いながらのわずらわしい旅というのが大部分ではあった。このような旅の中でもっともわたしを魅惑したのは、じゅうたん・化石・やきものであった。1度目の旅は貧乏旅、そしてバックパックの旅故、涙をのんで買えなかったものが多々あった。とくに化石。わたしはモロッコに行くまで三葉虫やアンモナイトの一大産地とは、実は知らなかったのである（私は化石研究者ではない。専門分野は岩石）。このとき買ったのは手のひらよりちょっと小さい三葉虫である。だいたいなんでもそうであるが、観光客の買うものに定価はついていない。その三葉虫を200DH（2400円）で買うのに30分も値段交渉が必要だった。もっとほしかった三葉虫は3日交渉したが値段が下がらず買えなかった。だいたい最初の価格は（私が妥当と思う）10倍以上から交渉はじまるのである。化石の重さと、値段交渉のわずらわしさのために最初の旅行ではあきらめるものが多く、いろいろな悔いが残っていた。

1999年12月中旬、旅行雑誌を見ていると（だいたいモロッコ旅行はこの会社のツアーもほぼ同じ行程で、東回りが西回りの違い）ただ1社だけ、砂漠ツアーに「アンモナイト拾い」付きのものがあつた。わたしはあと数席あいていることを確かめて即決で再訪を決めた。

2度目のモロッコは、7年ぶりのせい、わたしの旅行条件（ツアー、貧乏ではない）の違いか、1回目とは何もかもが違っているように思えた。同じなのは、旧市街のマーケットを1~2人で歩いていると、容赦なく話しかけたりつきまったりする男たちだけである。さすがに私は前回の鍛錬があるのでなれていて（母は恐ろしがるやら怒り出すやら……）。今回の再訪でよかったのは、前回貧乏旅で行けなかったカサバ街道やメルズーガ砂漠などを訪れることができたこと、重さ（化石）やガサのあるもの（キリム、焼き物）のショッピングが気兼ねなくできたことである。しかし、非常に失望する現実にもであった。化石にせものがかかり売っていたことである。旅行第2日目、カサブランカからマラケシュにバスで移動する途中、トイレ休憩で寄ったカフェのとなりには化石と鉱物のお土産屋があった。ここでわたしは2種類の三葉虫を買ったのだが、あとでそのうちの1匹と同じ種類の三葉虫をマラケシュの旧市街マーケットで見つけて、おどろいた。2匹の三葉虫をホテルで並べて見比べて、最初買った方が偽物（きれいに石の上に据ったレプリカ？）だったのである。この現実を知って、化石屋をのぞいてみると、あるわあるわたくさんの偽物が『店員が「これどうだい、5000円にしとくよ。」わたし「それ、偽物じゃないの（怒）！ 私は地質家よ！」、店員「そう、偽物だから5000円、こっちの本物は30000円だよ」という調子である（日本でモロッコ産の同じ種類の三葉虫を標本屋で買うより高いぞ！）。にせもの化石は、観光客のいくお土産屋ほど見かけることが多かった。1回目の旅行では、わたしが偽物にたまたま出会わなかったせいなのかどうかは今となってはよくわからない。しかし、にせもの存在は、化石はほとんどが外国人旅行者のお土産向けであるのを見ると、本当に残念に思うのである。私でも買ってしまいうにせものもある。旅行中、他の参加者が、私が地質家と知って、買った化石を見てほしいと持ってくるのだが、私と同じ土産屋で買ったサソリの化石はすべて偽物であった。ということで、その後の旅行中、他の人たちが化石を買うときの鑑定と値切りは、私が一手に引き受

けることになった。

モロッコはアフリカ大陸の北西端に位置する。アトラス山脈をはさんで北西側の地中海性気候の肥沃な地域と南東側の砂漠にオアシスの点在する地域からなる。アトラス山脈はアルプス造山帯の一部で、現在のような高い山脈になったのは新生代末期の上昇によるものである。また、アトラス山脈はアトラス帯に属し、南アトラス破砕帯によって北のハイアトラスと南の先アンチアトラスに分けられる。アンチアトラスには古生代末のバリスカン造山帯で、ハイアトラスより低い山並みから成る。アトラス帯には厚く古生代の海の地層が分布し、中生代初期に大陸的環境になるが、ジュラ紀初期から中期にはまたテチス海が侵入してくる。お土産のアンモナイトや三葉虫やサンゴやペレムナイト等々の化石はそのような産地を背景に持つことによるのである。私にとってこのツアーの一番お目当てのアンモナイト拾いは、砂漠の日の出ツアーの帰りに組まれていた。砂漠のなかに、小屋と露頭があり、どうも入場料？をだして捨うらしい。なんと、この日の朝の予定が遅れていて、たった10分の採集だった。露頭や転石を見ると海ユリの化石（古生代）がたくさんある。なぜ、ここでアンモナイト（中生代）がとれるの？と疑問に思ったが、疑問はすぐに解決した。アンモナイトではなくゴニアタイトという古生代末に滅びた古アンモナイトと呼ばれるものだったのである。

（教育学部助教授）
（附属博物館学芸研究員）



資料紹介

オオクチバス (ブラックバス)

Micropterus salmoides (Lacepede)

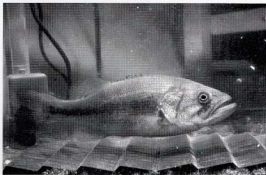
博物館の展示室を入ると直ぐ左側の水槽の中に僕はいる。僕が博物館に棲むようになったのは、平成11年の特別展「人と動物はいま……」で展示物になった時からだ。それまで僕は山形県尾花沢市の貯水池でめだつた外敵もなく平和に暮らしていた。忘れもしない11月8日、その日がすべての始まりだった。僕は、ほんの一瞬、ゴカイかミミズの類が鼻先をかすめたような気がして、本能的に、クニクニ泳ぐ黒く細長い物体を飲みこんだ。それがセンコーと呼ばれるワーム (疑似餌) の一種だと気づいたときには、もうフックが自慢のオオクチに突き刺さっている。食欲旺盛の僕らにはよくある事だ。仕方がない、どうせ直ぐに逃がしてもらえんと思っていた。しかし、僕を釣上げた釣人は、何故か、バス釣り暗黙のルール「キャッチ・アンド・リリース」を守らなかった。あれから、もう一年になる。一年前は15cmほどだった体長が、乾燥オキアミのますい餌のおかげで、25cmになった。小さな底面ろ過式水槽 (35cm四方、高さ25cm) は、このごろ窮屈になっている。しかし、僕らの平均的な体長は30~50cmだから、本当に大きくなってしまったら、この水槽には入れられないだろう。たまには生きた餌を食べたい。僕は小魚が好物だ。全国の河川、湖沼で最近激減しているという、ワカサギ、コブナ、ホンモロコ、ニゴロブナといった主要水産魚種が好物だ。僕は体重の3~10倍の餌を必要とする。自分でも持て余すほどの食欲を持っている。こんな小さな水槽で飼われるには似つかわしくない魚だ。いや、本来こんな小さな島国、日本にいるはずのない魚だったのだ。

僕らオオクチバスは、もともと北アメリカの淡水に住んでいた。日本へは、人間が釣りを楽

しむために移入した。大正14年 (1925) 5月、赤星鉄馬という実業家がオオクチバス約90匹を米国カリフォルニア州より持ちかえり、神奈川県芦ノ湖に放流したのが始まりだ。当時から生態系へ及ぼす影響が危惧され、別の水系に持ち出すことは厳しく制限されていたのだが、70年代初頭には、滋賀県琵琶湖や山梨県河口湖で発見された。そして80年代には若者を中心としたルアーフィッシングブームが到来した。この30年間ほどの間にすさまじい勢いで増え、現在では全国で生息が確認されている。ルアーフィッシングブームとバスの生息域拡大は偶然の一致ではない。陸上を歩くことも、飛ぶことも出来ないバスがどうやって生息域を拡大できたのだろう。釣り場を拡大するために人間がオオクチバスを移植・密放流したとしか考えられない。

ルアーフィッシングとは、ミミズ、ゴカイのような生きた餌を使わないので清潔だから女性も参加できるらしい。実際、自分で釣り上げておきながら、僕らを気持ち悪がってフックからははずせない失礼な女性もいる。30秒ごとにキャストするから、従来の「じっと待つ釣り」ではなく様々な道具とテクニックを使って能動的に魚とのファイトを楽しむスポーツ感覚の釣り、しかも、「キャッチ・アンド・リリース」だから魚や環境にも優しいのだそうだ。

しかし、そんな都合の良いことばかりではない。ルアーの中でもソフトルアーはかなり問題だ。僕らはワーム (疑似餌) を誤って飲み込んでしまうと、消化できずに死んでしまう。マナーが悪い釣



人は湖岸に千切れたワームを捨てていく。あまりにも精巧に造ってあるから、野鳥だって食べてしまうかもしれない。石油を原料とするワームの溶剤が環境ホルモンとして溶け出している可能性もあるそうだ。バスの生息地である山上の湖沼は人間の飲み水として利用されることが多い。人間にとっても大問題だろう。芦ノ湖ではワームが使用禁止になったが、ほとんどは規制もいまま流通している。

「キャッチ・アンド・リリース」にしても、バスのためになるのか怪しいものだ。釣った魚をわざわざ逃がすのは、何度でも釣り上げるためだ。僕は釣られるために放流され、釣られる度に傷つき体力を消耗する。「キャッチ・アンド・リリース」は人間が釣りの楽しみのためだけに、バスの生命をもてあそぶ行為だ。釣人が十分な釣果を得られるバスの生息密度と、生態系への影響が少ないバランスをとれたバスの生息密度との間には大きな隔りがある。バスを過剰なまでに増やすことを目的としてきたルールは成功したわけだ。しかし、現在ではバスの再放流が禁止になった県（新潟県、宮城県など）もある。山形県では「山形県内水面漁業調整規則」で外来魚の移植の禁止として、オオクチバス、コクチバスその他のオオクチバス属の魚およびブルーギルの無許可での移植・放流を禁止し、違反者には6ヶ月以下の懲役、若しくは10万円以下の罰金という厳罰の規則が平成8年3月1日から施行されている。このような規制は全国に広がりつつある。

今や、バス釣り愛好者は100万人を超え、バス関連産業は年間数百億に達するそうだ。バスをめぐる様々な問題をこのままにしておけば、バス釣りそのものが衰退するだろう。ブームが去った後、残された僕たちはどうなるのか。依然として日本の湖沼の生態系を脅かし続けるだろう。少々、愚痴を言い過ぎた。しかし、何を言っても僕のはもとの棲かへは還れない。一生、博物館の水槽で暮らすしかないのだ。



お知らせ

平成13年4月1日から「行政機関の保有する情報の公開に関する法律」が施行されます。本館の古文書史料は、「歴史的若しくは文化的な資料又は学術研究用の資料」（貴重文書）としての指定により、これまでと利用方法が若干変わります。

本館では、近世地方文書を中心に3万点に及ぶ古文書史料を所蔵しています。整理・分類済みで活字化されている目録は平成12年度現在、23号まで出版されていますのでご紹介します。

古文書史料目録

- 第1号 大石田 渡辺喜助文書
- 2号 寒河江市慈恩寺 最上院文書
- 3号 東村山郡山辺町大蔵 稲村家文書
- 4号 天童市久野本 青柳清兵衛家文書
久野本村文書
- 5号 山形市 錦洗文書
- 6号 天童市荒谷 村形家文書
- 7号 山形市 三浦文庫文書（一） 県内各地
- 8号 山形市 三浦文庫文書（二） 中津川村
- 9号 山形市 五十嵐清峯収集文書
- 10号 山形市 三浦文庫文書（三） 県内各地
- 11号 村山市榑岡 最上徳内史料
- 12号 山形市長谷堂 須貝長吉家文書
西川町吉川 笹島長左衛門家文書
- 13号 山形市 三浦文庫文書（四） 県内各地
- 14号 長井政太郎収集文書 県内各地
住吉榮作収集文書 山形市内
- 15号 大江町月布 大泉次郎右衛門家文書
高島町入生田 栗田富藏家文書
山辺町山辺 垂石権吉家文書
- 16号 東根市松沢 阿部宇右衛門家文書（二）
県内各地域文書
- 17号 山形市陣場 斎藤武一郎家文書
山辺町大蔵 稲村七郎左衛門家文書
南陽市鍋田 戸田新兵衛家文書
米沢市 上・下新田 新田村文書
- 18号 米沢市 安田家文書
- 19号 山形市三日町 小島源兵衛家文書（一）
- 20号 東根市松沢村 阿部宇右衛門家文書（一）

松沢村文書

21号 県内各地域文書

22号 工藤定雄収集文書

長井市成田村 佐々木宇右衛門文書

23号 川西町大塚 高橋九兵衛家文書

各目録共、博物館事務室で自由に閲覧していただくことができます。なお、別途手続きが必要となりますが、古文書の現物も閲覧できます。詳細については、事務室係員にお尋ね下さい。

平成12年度事業報告

平成12年度に本館で実施した博物館実習の単位習得者数は次のとおりです。

(単位：人)

区 分	1 回 目 8.14～17	2 回 目 9.19～22	合 計
人文学部	19	20	39
教育学部	7	4	11
理 学 部	19	5	24
合 計	45	29	74

公開講座は、「愛と性の博物学」のテーマで開講し、定員の30名を越す盛況となりました。

講師・演題は下記のとおりです。

第1回 10月7日(土)

・フランス近代美術と「性」の表象

山形大学助教授 阿部成樹

・江戸の遊廓—文化のゆりかご—

明海大学助教授 山本陽史

第2回 10月14日(土)

・日本現代文学における愛と性

山形大学助教授 中村三春

・女いじめの法律から男いじめの法律へ?

山形大学教授 土屋和恵

第3回 10月21日(土)

・いきものたちの愛と性

—多様な表現とその本質—

山形大学助教授 小田隆治

・淫らなるルネサンス絵画

山形大学教授 元木幸一

特別展は、平成11年11月6日から17日までの10日間、「山大博物館のお宝」と題し開催。展示中の収蔵品や未公開・新収蔵品の中から選りすぐりの貴重な「お宝」を、学内外の方々に見ていただくことができました。特に長谷堂城の城門は常設展示室にスペースがないため、普段は収蔵庫に格納されており、学内では初めての公開となりました。

平成11年度見学者総数

一般成人	個人	286人
	団体	140
大 学 生	個人	1,213
	団体	395
児童・生徒	個人	2
	団体	112
合 計	個人	1,501
	団体	647
	総数	2,148

山形大学附属博物館報 A27 2001.3発行

編集兼発行人 山形大学附属博物館

〒990-8560 山形市小白川町一丁目4-12

(TEL) 023 (628) 4930 (直通)

(FAX) 023 (628) 4909

<http://lib3.kj.yamagata-u.ac.jp/library/hakubutukan.html>